

イスラエル珍道中レポート

この度 BEHOLD ISRAEL の若者ツアーに参加させていただきました、えり子です。このツアー参加に際しまして、たくさんの方から様々なご支援をいただいたこと、また、心に留めて祈り続けていただいたことをおぼえ、厚く感謝いたします。感謝の意をこめまして、今回の旅のレポートを稚拙ながら書かせていただきましたので、どうぞ最後までお付き合いください。

1,イスラエルツアーに至るまでの経緯

まずはこれを書かねば先へ進めますまい。この経緯ですが、2年くらいの期間がある上に、私の視点と両親の視点と両方から書かねば話がつながらないため、複雑にならないように気をつけながら進めていこうと思います。

始まりは2015年の夏頃、私の母が Youtube で木下さんのチャンネルである「Divine Us」に出会ったことでした。「Divine Us」で Behold Israel のアップデートを紹介するようになったのはその1年程後ですが、神様の粋な計らいで、母は日本版「ビホールド・イスラエル」の日本語字幕をテキスト化する働きに携わらせていただくことに。

2016年12月、とある動画の最後に「ヤングアダルトツアー」とツアーのスカラシップについての告知がありました。それを見た母は、「身内を勝手にジャニーズに応募する母もしくは姉」よろしく(少なくとも私の目にはそう見えた)、私をスカラシップに申し込み、なんと採用されてしまったのです。残念ながらそのときは、渡航費が工面できないという理由で参加を断念しますが、その際、Behold Israel の担当者から「この粋は来年のツアーに繰り越しますね！」との返答がありました。しかし私の家庭は経済的に厳しい状況に置かれており、両親は非常に不安を覚えます。

今年の1月、やはり渡航費の問題がクリアできず、母が Behold Israel の担当者に「スカラシップを辞退したい」とメールを送信しました。すると翌日、木下さんから連絡が。内容は「Divine Us を通して募金を募りたいと思うけれど、告知してもいいか？」というもの。両親はこの展開に驚きつつも、神様を褒めたたえ、委ねて待つことにします。1週間もたたぬうちに必要が満たされたという連絡が入り、受けるに値しない私たちに、想像もしなかったよいものを与えてくださる神様を褒めたたえました・・・というのが両親の経験した、娘がイスラエルに行くまでの経緯です。

両親が Divine Us と木下さんに出会ったころ、私は翌年から始まる大学の卒業論文、および就職活動について悩んでいました。大学では4年間日本文学科に在籍し、古事記から始まり現代の日本文学に至るまで、果ては伝統芸能やら日本語学やら様々な学んできたけれども、その集大成として研究したいものが見つからない。就職についても、生活のために収入は必要だけれど、接客に秀でているわけでも事務職に向いているわけでもない。趣味でずっと描いてきたイラストを仕事にしてみたいけれど、大したビジョンがあるわけでもなく・・・といった風に、頭の中は自分のことでいっぱい、神様が私になんと語りかけているか、なんて聞く余裕はどこにもありませんでした。また、私が在籍していた大学はミッション系の学校で、聖書を軸にした素晴らしい教育理念を掲げていましたが、そこで

教鞭をとる教授たちは皆がみな素晴らしいわけではありませんでした。信仰を持った教師はごくわずか。しかも一番信仰深くあるべき聖書を教える教授たちは、ゆがんだ聖書理解と価値観を積極的に愛する人々でした。クリスチャンの学生もわずかにいましたが、みな救いの確信のない信仰的に幼い人ばかりで、私は高慢にも彼女たちの信仰の幼さに辟易し、見下してさえいました。なぜ正しい聖書の価値観が教えられるべき学校を、大嘘を並べ立てる教師たちが大きな顔をして闊歩しているのか、正義であられるわが神はなぜそれを良しとされるのか。また、クリスチャンの友人たちにどんなに真理を語っても、信仰の成長を助けるどころか、心を閉ざされて懐疑的になっていくのはどうしてだろうか。私はこんなに精一杯やっているのに！

そんな状態を引きずり続けた結果、あらゆることに興味を失い、人間不信に拍車がかかり、当たり前ですが就職は決まらず、大学は半年間留年することになります。もうどん底。

そんな中で、久しぶりに聖書を開くと、そこはイエス様の十字架の箇所でした。バラバが釈放される所を読み、その箇所の解説を読んだとき、私は初めて神を畏れる、という経験をしたのです。私もバラバと同じ様に神様から特別に赦していただいている罪人なのに、それを無視してなんと高慢な態度をとってきたのだろう。そして、文字通りひれ伏して悔い改めの祈りをし、そのとき一緒に「神様の栄光を表すために、私をどんなところにもでも遣わしてください」と祈りました。それが今年の1月。

その後すぐに、母から「イスラエルツアーに申し込んだから！」と言い渡され、私は尻込みします。いや、確かにどこにもでも行きますとは言ったけど。言ったけれども。なぜイスラエル！？日本から出たことないのに！英語しゃべれないのに！ムリ！怖い！この時は先述したように、経済的な理由から延期になりますが、今年の1月、預言者ヨナが命令から逃げ回るように、どうにかこの旅行から逃げようとする私に神様は、どう見たって神業としか言えない方法で経済的満たしと、言葉の壁に対する助けを与えてくださいました。両親は素直に喜んでいましたが、どこに逃げても無駄だと知った私は、改めて神様の偉大さを見せ付けられ呆然としていました。

この旅行に至るまでの間に、私が学んだことは、

- 1 神様は私が思っているよりもはるかに偉大である
- 2 神様は人間が自分から祈ることを待っておられる
- 3 神様の御心からは絶対に逃れられない

ということです。

かくして、不信仰な私は、空飛ぶ大きな魚(飛行機)に飲み込まれ、イスラエルへ旅立ったのでした。

2,イスラエルツアーのレポート

さて、いよいよ本題です。ちなみに私は英語がほぼ理解できません。ですので行く先々でどんな解説があったのか、ということに関してはあさふさんの通訳にかなり頼っていました。そんなわけでレポート内容が丸かぶりになってしまうことを避けるため、単純に行って感じたことやその場で起こったエピソードを中心に書いていこうと思います。

5月31日、成田空港であさふさんと合流し香港へ。真夜中に香港に到着し、オーストラリア組の2人と合流…のはずが、ベンチにいたのは1人だけ。もう1人は？という「柱の影で寝てるわ」という答えが。ええ～、ずいぶん気ままな人だなあ……。結局、この

もう1人と顔を会わせたのは、イスラエルに着いてからでした。

6月1日、空港からホテルに移動し、5名の付き添いの方たちと顔合わせ。チェックインまでのしばらくの時間、オーストラリア組と一緒にホテル近辺の散策に出かけます。青い空！青い海！力強い太陽！あまりの力強さに負けて、フライト疲れした私たちは早々にカフェに避難したわけですが(笑)。

ホテルに戻ってアメリカから来た子たちと合流。そのうち2人はなぜかずぶぬれ。聞けば海で遊んできたそう。10代の無尽蔵な体力にビビる20代でした。早めにチェックインできることになったので、部屋でしばし休憩。夕食後、オリエンテーションが行われ、簡単な自己紹介や翌日からの注意事項などの説明があった後、この日は解散。

6月2日、この日訪れたのはヨッパ、カイサリア、カルメル山、そしてナザレの近くにある断崖の山。

ヨッパはとても美しい町でした。海外旅行系のテレビ番組が好きな方はお分かりになると思いますが、白い石壁に石畳の細い路地、そこから見上げると鮮やかな青い空、時折現れる猫……。と、いった感じで、まさに地中海に面した町！といった佇まい。道々、壁に貼られているポスターも味のあるものばかりで、歩いているだけでわくわくする場所でした。

次に向かったのはカイサリア。オッシュャレーなレストランで昼食をとった後、海岸沿いにある遺跡を見て回りました。カイサリアの海岸は何度も戦争の際に砦として使われてきたところで、十字軍の要塞を見ることができます。カイサリアといえば、イエス様の時代にはローマ総督ピラトが駐在していた場所でもあります。お屋敷の跡や円形劇場など、ローマ風の建築物がそこかしこにありました。円形劇場は現在も野外ライブ会場として使われており、歴史を感じる客席にめっちゃ現代のライブセットというアンバランスさが、遺跡だらけの海岸の中でひととき異彩を放っていました。

エリヤがバアルの預言者たちと対決した山、カルメル山は大きな山でした。山頂は花とサボテンが咲き乱れる庭園と野外礼拝所、それと展望台があり、とても見晴らしが良かったです。ただし、景色に見とれてるとスリに会う危険もあるのだそうです(こんな場所でスリとは、ふてえヤロウがいたものです)。野外礼拝所にはカトリックのマリヤ像と、十字架がちょっと離れたところに置かれており、「ここにマリヤ何の関係もないやないか〜」とか思いつつ、アミールさんの話に耳を傾けておりました。観光地はなんでもありなのです(笑)。

この日最後はナザレ近くの断崖の山。この山も結構高い山で、しかも大きな岩がごろごろ。イエス様を突き落とそうとしたナザレの人たちが、本気で殺す気だったことを知りました。こわいこわい。

泊まったホテルはガリラヤ湖のほとりのリゾートホテル。中庭やコテージもある広くてゆったりとした良いところでした。

6月3日、この日はガリラヤ湖の上で礼拝を捧げ(といってもみんなで湖の上を歩いたのではありませんよ。ボートに乗ったのです)、湖の周りで福音書に出てくる有名なところをぐる〜と巡り、ヨルダン川でカヤックに乗りました。ガリラヤ湖は水が透き通ってとてもきれいです。夏のバカンスにはガリラヤ湖をおすすめします。一方でヨルダン川は茶色い濁った水の流れるきたな……。ワイルドな川です。ええっ、ガリラヤ湖から流れてきて

いるのに、何でこんなに違うの!?!と驚きましたが、何はともあれ、カヤックは楽しかったです。



6月4日はゴラン高原で Face book ライブと、サンドバギーに乗る予定でしたが、残念ながら体調を崩して1日ホテルにいました。実は一番楽しみにしていたプログラムだったため、参加できなくてとても悔しかったのですが、今振り返るとその後の日程を乗り切するために必要な休息でした。良い休息を与えてくださった神様に感謝しています。

6月5日、この日はマグダラで発見され、今も発掘が続いているシナゴグ(会堂)跡を見学した後ガリラヤ湖を離れ、死海に向かって南下していきました。途中、ベイト・シエアンにあるスキトポリス遺跡とカスル・エル・ヤフドに立ち寄りしました。スキトポリス遺跡は遺跡の中を自由に歩くことができます。

カスル・エル・ヤフドは、ヨルダン川を挟んですぐ向かいがヨルダンのエリコ。川の真ん中に柵が立てられ、対岸には銃を持ったヨルダンの兵士が警備している、ちょっと緊張する場所でした。イスラエル側のこの場所はイエス様が洗礼を受けた場所として有名な観光地です。私たちのグループでも何名かがここで洗礼を受けました。

この日泊まったホテルは死海のほとりにあるリゾートホテル。プライベートビーチがあって、存分に死海を堪能できます。死海に来たからには浮いてみなくては!と思い、ビー

ちに降りましたが、アトピー性皮膚炎と超敏感肌が弊害となり、浅いところを歩き回るのが限界というトホホな結果に(涙)。水はぬるいわ、なにやらぬるぬるするわ、不思議な感覚の塩湖でした。

6月6日、この日は死海周辺の重要な場所、マサダ、エン・ゲディ、クムランの3箇所とジェネシスランドを回り、そしていよいよエルサレムに入ります。この日は日差しが強く、ハイキングには向かない日でしたが、訪れたところはいずれも外を歩き回る系の場所。誰も具合が悪くならなかったのは、神様の守りにほかなりません。

マサダは巨大な岩山の山頂にあり、麓からのロープウェイで上ります。草木が一本もない、寂しい場所でした。まだ朝なのにカンカン照りで干からびそうでしたが、頂上からの眺めは絶景でした。

エン・ゲディはダビデがサウルから逃げて隠れた場所。現在は国立公園で、マサダとは打って変わって自然豊かなところ。細い岩だらけの道を汗だらだらで奥まで上っていく、終点はダビデの滝。その滝の冷たさと美しさに軽くテンションマックスの一同でした。

昼食の後、死海文書が発見されたクムランをさっくり見て、ジェネシスランドに向かいます。ダマスコのエリエゼル(に扮したこの職員)が出迎えてくれて、ラクダに乗って時空を越え(という設定で)、アブラハム(に扮した以下略)に会いに行きました。ここでまさかの2度目の昼食。ジェネシスランドというからには羊とかパン種を入れないパン菓子とか、そういったアブラハムが客人に振舞った料理の再現メニューなんかが出てくるのかしら？と、少し期待をしていました。が、出てきたのは普通にふっくらしたパンとなぜか照り焼き風味のチキン。ええ〜っ詰めが甘いよ〜、と内心想いましたが、おいしかったので文句はありません(笑)。それにしても、醤油のない場所でどうやって照り焼きを作ったのかが気になります。

その後人生初、ラクダに乗りました！そこで感じたのは、ラクダは人懐こいですが決して従順ではないということです。エリエゼル(役の人)がラクダを先導していましたが、立たせるのも座らせるのも、1回じゃ言うことを聞きません。まるで神様の命令になかなか従わない人間の様。ラクダを見て自分の罪深さを悔い改めようとは、夢にも思いませんでした。



ラクダに乗った後はエルサレムへ。エルサレムの道のつくりはなかなか粋です。トンネルを抜けると、写真でよく見るあの旧市街の町並みが、パッと目に飛び込んでくるのです！あの興奮を分かち合いたいのですが、うまく言葉にできないのが非常に残念です。

6月7日、この日は早速オリーブ山へ。ここにいずれイエス様が戻って来るんだあ！と思うと感無量です。現在のオリーブ山はユダヤ教徒の高級墓地になっています。彼らはやがて来る復活のときに、いの一番にメシアに救ってもらうためにここの墓地を買うんだとか。そしてもう1つ、特筆すべきことは、オリーブ山の周辺には結構、物乞いをする人が多くいます。ある物乞いの老人が「シャローム！」と言いながらお椀を差し出してきましたが、このユダヤ人の老人よりも外国人の集団である私たちのほうが、本当の救いを知っている、ということにいたたまれない思いでした。エルサレムに行くと、エルサレムの救いのために祈らずにはいられなくなります。

オリーブ山の次はゲツセマネの園。花の咲き乱れる美しい庭園でした。

昼食後、ダビデの町とヒゼキヤのトンネルへ。ヒゼキヤのトンネルでは学校の遠足でしょうか、たくさん子どもたちとすれ違いました。「うわあ、外国人がたくさんいるー！」と言う顔をして、説明を聞いている私たちの脇を通り過ぎていく子どもたちに向かって、仲間の1人が「シャローム！」と手を差し出していると、みんな怪訝そうにハイタッチを返していました(笑)。

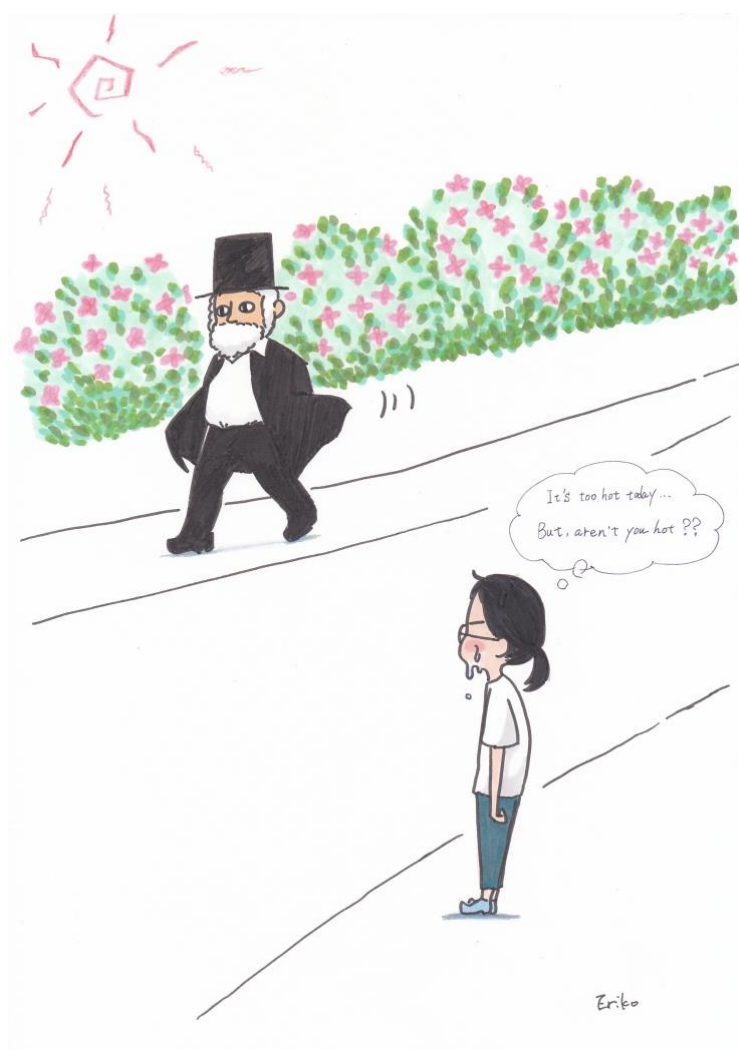
この日は夜にエルサレムの街にくり出してショッピングの時間がありました。商店街は夜もにぎやかです。道端で楽器を演奏している人やカフェでコーヒーを楽しむ人など、昼間の暑さから開放されて、ゆったりとした空気が流れていました。

6月8日、この日はイスラエル博物館とホロコースト記念館へ行きました。イスラエル博物館には50分の1の縮尺の第2神殿時代のエルサレムの模型があります。また、死海文書とそれに関する資料の展示も見ることができます。他にも面白そうな展示がたくさんあるようですが、今回見たのはその2つだけ。この日のメインはホロコースト記念館でした。

ホロコースト記念館には、第2次世界大戦下で行われたユダヤ人迫害、虐殺について、膨大な資料が収められています。いかにして迫害が始まったのか、どのようにして600万人もの命が奪われたのか。目を覆いたくなるような写真もいくつもありません。この日の昼食は、記念館の中にあるカフェテリアで摂りましたが、このときほど食事がのどを通らないのはツアー中初めてでした。

6月9日、土曜日だったので皆で礼拝をささげました。場所は園の墓。墓の中はからっぽでした。ハレルヤ！

その後ダビデの塔と大祭司カヤパの邸宅跡の教会に行きました。ダビデの塔には天井から変な黄色のもじゃもじゃがつるされているところが。あれが何だったのかは今だに謎です。中は小さな博物館と展望台になっていて、前日にイスラエル博物館で見られなかったイスラエルの歴史を学ぶことができました。展望台部分には国旗がひらめいています。どんなに写真が下手でも、たっぶりの光と強い色彩のおかげで、きれいな写真が取れるのがイスラエルのいいところの1つです。



カヤパの邸宅跡に建てられている教会の中庭には、3回イエス様を知らない、と言うペテロの像が立てられていました。

6月10日、最終日、神殿の西壁と南側の階段、世界遺産にも登録されたベト・グヴリン(マレシヤ国立公園)、そしてエラの谷を見て回りました。この日は最終日と言うこともあって、仲間たちのうち何人かとは飛行機の都合で途中で別れ、寂しさが募る1日となりました。

神殿の西壁は、セキュリティがとても厳しいです。前日に「刃物持ってくと警察に取調べされるからね～」と注意され、英語がしゃべれないのに取調べなんかされたらややこしいことになる！震え上がりました。受付には空港で見たことのある手荷物検査の機械とボディチェックのゲート。そしてガタイのいいガードマン。幸い、誰も引っかかりずに通り抜けることができました。本題の西壁は、写真で見たとおり、壁に向かって祈る人たちでいっぱいでした。熱心に祈るユダヤ教の人たちを見て、オリーブ山で感じたいたまれなさでまた心がいっぱい。

最後に訪れたエラの谷は、谷と言うより丘にはさまれた平地、と言った感じの場所。ですが確かに、滑らかに削られた石がたくさん落ちていました。

最後に皆で夕食を食べ、涙ながらに別れを惜しみ、私たちは翌日の飛行機で帰る数名とホテルへ向かいました。

6月11日、空港のセキュリティチェックのあまりの厳しさに、10日間で大好きになったイスラエルを危うく嫌いになりかけました(笑)。何がそんなに厳しいのかと言うと、手荷物検査がなかなか終わらないのです！しかも一緒に帰るオーストラリアの子は比較的スムーズにできたのに、私とあさふさんの荷物はいやに丁寧に調べる調べる……。おかげで空港で買おうと思っていたお土産は買えませんでした。後で母にそのこと話すと、1972年に起きた日本赤軍による銃乱射事件とかも関係あるんじゃないか、と言われました。何だって、許さんぞ日本赤軍。おかげでお土産を買う時間がなくなったじゃないか。と、言うのは冗談ですが、最後の最後にイスラエルと日本の関係に目を向ける機会が与えられたのは感謝なことです。

香港でいよいよ一番長く旅をしてきたオーストラリア組の2人とも別れ、6月12日、無事に成田空港に到着しました。

3. 感想とまとめ

日本から出たことのない、英語も分からない私が、イスラエルに行ってきました。「ない」で言えば、私にはないものだらけです。就職してない、お金ない、友人も少ない、恋人もいない、などなど。傍から見ればいわゆる人生の負け組、社会のクズと言われるような状態だし、私自身も最近まで自分のことをそう思っていました。

しかし、私をイスラエルに行かせるために神様がしてくださったことと、ツアーで見たもの、教えられたことを通して、私の考えはすっかり変えられました。ローマ人への手紙8:32に書いてあるとおり、私の罪を赦すために、独り子をさえ惜しまずに与えてくださった方が、そこまでして買い取った私を見放すわけがないと知りました。

今回のツアーに参加した1人ひとは、国籍も年齢も職業もばらばらでしたが、皆、同じ聖書の神様をまっすぐに信じている信仰者である、と言うことに私はとても励まされました。また、それぞれ与えられている仕事や役割は違いますが、ガイドでも、歌手でも、

医者でも、神様から与えられた賜物を、喜んで神様のために用いて仕事をしている姿がとても印象的で、今回の出会いは「仕事」に対する考え方が変わるものでした。

自分の弱さしか見ていなかった私が、イスラエルへ行くことを通して、神様のすばらしさや与えられている恵みに注目するようになられました。これで終わりではなく、むしろこれから、神様が用意しておられる計画に期待して、信仰を持って進んで行きたいと思えます。

最後になりますが、今回のツアーのために援助してくださった皆様、祈りによって支えてくださった皆様に心から感謝申し上げます。皆様に神様からの祝福が豊かにありますように。栄光が主にありますように。

えりこ